

# 文学を教えること・学ぶこと

～イギリス児童文学を題材に～

佐藤 和哉

はじめに

本講演のテーマである「文学的テキストを大学で教えること、学ぶことの意味」については、この学会のような人文学に関わる人びとのあいだでは一定の合意があるのではないかと考えられるが、その一方、文学的テキストおよび、その研究方法を大学で教えたり学んだりすることに関する実践について、研究者や学生のあいだで情報を共有し、論点を整理するのは可能でもあり必要とされるところでもあるだろう。

文学は「役に立たない」！

はじめに、文学研究を「非実用的」であるとして排撃する言説の例を紹介する。2014年10月7日に行われた「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議」における資料として、富山和彦氏（株式会社経営共創基盤代表取締役 CEO）から提出された「我が国の産業構造と労働市場のパラダイムシフトから見る高等教育機関の今後の方向性」という文書がある。この資料においては、大学を「G（グローバル）型」と「L（ローカル）型」に分け、国際的競争力を持つ「G型」ではない「L型大学」の文学部では、「シェイクスピア、文学概論」ではなく「観光業で必要となる英語、地元の歴史・文化の名所説明力」を教えるべき、とされている（なお、法学部では「憲法、刑法」ではなく「道路交通法、大型第二種免許・大型特殊第二種免許の取得」を目指すべき、としている）。このような文学的テキスト・文学研究に対する政界や財界の（無）理解は今に始まったことではないが、このような言説に対しては、異議を唱え続ける必要がある。

文学は「役に立つ」！

少し横道に入るが、今の資料で「役に立たない」ものの典型例とされたシェイクスピアであるが、*William Shakespeare's Star Wars* (2013) のようなパロディ物に見られるように、ハリウッドをはじめとする娯楽産業において、インスピレーションを提供し続けているとも言われている。また、『ピーター・ラビットのおはなし (*The Tale of Peter Rabbit*)』(1902年)をはじめとする多くの絵本を生み出したベアトリクス・ポッター (Beatrix Potter, 1866-1943) は、ビジネス・パーソンとしても極めて有能であり、「ピーターラビット」をはじめとする、自らの生み出したキャラクターでビジネスを興したこともよく知られている。いわゆる「キャラクター・ビジネス」の端緒である。「経済的有効性」を「役に立つ」ものとする価値観は文学研究の立場とは相容れないが、「文学不要論」に対する言説として、たとえば、後述する「クマのプーさん」やハリー・ポッターが商業的に「売れる」キャラクターであり、ビジネスとしても大きな価値を持つ、という指摘も無視できない説得力を持っている。

大学教育の専門性：文学教育の専門性とは

一方、大学（高等教育）における文学研究不要論の一つの原因として、文学研究・教育に対する、「本を読むのは誰でもできる」という誤解や偏見があるのではないかと考えられる。これは、法学、工学や医学などのように、一般的に高度な専門性が求められるとされるような学問分野に比べて、専門性の認知度が低いことに起因する。しかし、言うまでもなく、「ただ作品を読めばよい」という態度からは「感想」しか生まれず、文学研究が「研究」として成り立っているのは、「根拠」と「論理」に基づいた「意見」や「学説」を述べるからである。そのためには、研究が寄って立つための「理論」が必要であり、その点では文学研究は他の学問分野と違いはない。そして、「読む」という行為を内省し、「研究」へと昇華させるために、「批評理論 (Critical Theory)」が要請される。

批評理論をふりかえる

複雑多岐にわたる批評理論を短いスペースで概観しようとする、どうしても一面的にならざるを得ないが、それを前提として、ここで簡単に批評理論の概括を試みる。19世紀末から20世紀初頭にかけて、英語圏において高等教育が広がりを見せ、古典的教養を中等教育で身につけてきていない多数の学生を教えるようになったとき、古典教育をモデルに文学教育を構想していくなかで、最初期の文芸批評理論は構想された。そのため、当初は、作品中の難解な表現を読み解いて作者の意図をいかに正確に読み取るか、に力点が置かれる教育が施された。

このように「作者の意図」を研究対象の中心に据えるところから始まった批評理論は、その後、ニュー・クリティシズムから構造主義批評のように、テキストそのものに興味を集中させるようになり（この過程で生まれたの

が、「精読 (close reading)」とされる読みかたである)、その一方で、構造主義言語学の影響で「言葉」と「対象」の結びつきの恣意性が主張されるようになり (言語論的転回)、さらに、テキストの外へ関心を移すようになった批評理論は、テキストと社会・歴史・文化などとの関連やテキストの政治性に焦点を当てる方向へと展開する。そこから生じたのがジェンダー批評、新歴史主義、文化唯物論、ポスト・コロニアリズムなどであり、それと並んで、関係性がテキストを決定するという認識のもと、テキスト相互の結びつきに興味に向けられるようになる。

## インターテキスト

本講演では、このテキスト相互の関係性に着目する。先行するテキストと後から作られたテキストの関係性を「間テキスト性 (インターテキストチュアリティ)」、先行するテキストを「インターテキスト」と呼ぶ。パロディのように、製作者 (作者) によって明示的に関係性が示される場合もあるが、「間テキスト性」は作者の意図とは無関係なことも多い。そこから、「作者の意図」と必ずしも関係ない読みの可能性が生じてくることになるので、以下では、「作者の意図」とは無関係に成立しうるテキスト間の関係性に着目した「読みかた」について考えてみたい。

## 実例 : 『クマのプーさん』から

ここでは、A・A・ミルン (Alan Alexander Milne, 1882-1956) の『クマのプーさん (Winnie-the-Pooh)』(1926年) を例にして考える。この作品のインターテキストに注目して、以下の二点を指摘する。第一に、作品中には「穴に落ちるプー」、あるいは「穴にはまるプー」のイメージが頻出するが、このモチーフは、第一次世界大戦における「塹壕戦」の記述と共通するところがある。以下に、『プーさん』からの引用と、塹壕戦の記述の例として、エーリヒ・レマルク (Erich Maria Remarque, 1898-1970) 『西部戦線異状なし (Im Westen nichts Neues)』(1929年) からの引用を並置する。

このあいだずっと、プーは何とかしてハチミツの壺を頭から取ろうとしました。でも、頭を振れば振るほど、壺は頭にしっかりくっついているようでした。「やれやれ！」と壺のなかで言ってみたり、「助けて！」って言ってみたり。でも大抵は「う〜う〜」でした。何かにぶつけて壺を割ろうとするのですが、ぶつける先が見えないので、大して役には立ちません。落とし穴から這い出ようとしても、壺しか見えないし、その壺だってろくに見えてませんし、というわけでどこをどう登ればよいのか分かりません。とうとう、壺ごと頭をもたげて、悲しくて、どうしていいか分からなくて、大きなうなり声をあげました。(Milne, *Winnie-the-Pooh* 68-69、訳は引用者による)

僕は用心をしながら、砲弾穴の縁を滑り出して、前のほうへ這って行った。[...] それから方角を大たい目測して、帰る方向を見出そうとした。砲火の見当を頭において、そこで味方のほうへ連絡を取ろうとしたのである。 [...]

やがて新しい恐怖心が僕を襲った。どっちを見ても方角がわからなくなったからである。僕はある砲弾穴の中へじっと坐って、見当を見定めようとした。よろこんで塹壕へ飛び込んだら、それが違った塹壕だったというようなことは、たびたびある話だったからである。 [...]

けれどもどうすることもできない。僕はこの穴を出なければならぬので。止り止り僕は進んで行った。 [...] そのうちだんだん僕はこうしていつまでもうろうろ匍い廻っていは、命が危くなるという気がしはじめた。(レマルク 243-44、訳文は秦豊吉による)

この2つの文章のあいだに、相互の直接的な引用／被引用関係、あるいは影響関係はないにしても、ともに第一次世界大戦に従軍し、西部戦線で戦闘に従事した経験を持つ作家の筆から生み出されたものであること、発表年が近いこと、さらに、「穴」や「方向感の喪失」などの共通点を考えると、これらのテキストの並置から、1920年代のヨーロッパを覆っていた「塹壕の記憶」を読み取ることは可能であろう。

第二に、『プーさん』のなかで「ピクピクするピグレット／跳ねまわるトラ」に見られるような、不随意かつ神経症的な動きは、当時「シェル・ショック (戦争神経症)」と呼ばれた重度なPTSDの症状との類似を思わせるものがある。これは、一定以上の期間、戦場で、想像を絶するストレスがかかった結果、心身に異常を来すようになった症状であり、重度のチックや強い抑鬱状態を特徴とし、歩行や身体運動が困難になることもあった。『プーさん』のテキストを、陸軍省 (War Office) によるシェル・ショックの定義と並置することで、両者の共通性を見ることができる。このように、インターテキストに目を向けると、第一次世界大戦が歴史的に例を見ない被害を人に及ぼしたことや、テキストが歴史性にコミットしていることへの気づきをもたらすことができる。

## 文学教育にできること

ややもすると、「精読」という研究手法は、その行為そのもののイデオロギー性に無自覚になりがちであるという短所をもち、その短所は、上述のようなさまざまな理論を生じさせる契機となったが、だからと言ってその長所を蔑ろにして良いわけではない。テキストを綿密に読むことには、当然ながら重要な意味があり、とくに、その教育的な効果は大きい。テキストの「外」（歴史・社会・政治）への気づきとともに、テキストそのものを読解し、理解する力も涵養することが、文学の教育には可能であり、また必要でもある。そのことを端的に表した評言に次のようなものがある。ともに、2023年に亡くなったアメリカ文学・文化研究者、亀井俊介の言葉である。

文学の学問というのは、自分が面白いと思ったことを深く広く人に伝える努力なんです。この作品にこんなに感動したよということ人を人になんとか訴えたい、納得して味わってほしい、それが研究の「もと」なんだ、とそういう素朴な発想が僕には基本的にあるんです。(148)

文学作品を正面からきっちり読んで、その面白さの根源と自分が見極めたことを読者に、専門の学界の人間なんかよりもむしろ、なるべく幅広い読者に伝える努力をするということが、僕は文学研究の出発点で基本だと思うし、それをしたい、それをすべきだと自分自身に言い聞かせていることが多い。(282)

関心がテキストの外に向かう文学研究は、歴史学、社会学、政治学などとも互いに関わりあいながら、学問として深化しつつ、「精読」という要素の重要性もしっかり認識しなければならない。

## サルトルの問題提起：文学の今日的な意義

最後に、より広い視点から文学研究の今日的な意義について考えておきたい。かつて哲学者のジャン＝ポール・サルトルが「飢えて死ぬ子供の前で文学は有効か」という問いを立てたことは夙に知られている。ウクライナとパレスチナによって「戦争」や「飢餓」が前景化している現代、なお一層、文学研究者はこの問いに対して真剣に向き合う必要がある。

そもそも、「文学」が現実の政治と関係ないという立場は、現在では多くの研究者から否定されている。「文学理論は、政治的信念やイデオロギー的価値と分かちがたく結びついていた」とする、テリー・イーグルトンの見解は（下巻、156）、多くの文学研究者によって共有されている。中東文学、フェミニズム批評に関する研究者である岡真理は「記号に還元されない、人間が生きる具体的な生の諸相を描き、私たちの人間的想像力と他者に対する共感を喚起するもの、そのひとつが文学作品であるとすれば、冒頭のサルトルの問いに対する答えのひとつがここにあるのではないか」と提起している（12-13）。

さらに、そもそも大学の学問が何のためにあるのか、という問いにまで考えを巡らせると、その答えは「よい市民を作ること」であり、さらに言えば「世界中の人々が平和で幸せに暮らすこと」の実現である。歴史学者の弓削達は、歴史研究の意義について、「強者と富者の利己主義とその支配による似而非平和を暴き、弱者と貧者の生存と幸福を優先原理とする全く異質の平和構造の可能性を真剣に追求すること」であると説いている（18）。その観点から文学研究の意義を考えたとき、それは、想像力と共感する力の涵養であり、言葉に対する感度を上げて、Post-truth の時代にレトリックに「騙されない」ような学生を育てることである。そして、そのためには、「自分が面白いと思ったことを深く広く人に伝える努力」（＝言葉への気づき）もやはり必要ではないかと考える。

## 引用文献

テリー・イーグルトン（大橋洋一訳）（2014）.『文学とは何か：現代批評理論への招待』岩波書店。

岡 真理（2006）.『橐椰子の木陰で：第三世界フェミニズムと文学の力』青土社。

亀井 俊介（2017）.『亀井俊介 オーラルヒストリー』研究社。

富山 和彦「我が国の産業構造と労働市場のパラダイムシフトから見る高等教育機関の今後の方向性」([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/061/gijiroku/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/23/1352719\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/061/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2014/10/23/1352719_4.pdf))

エーリヒ・レマルク（秦豊吉訳）（1955）.『西部戦線異状なし』新潮社。

弓削 達（1984）.『明日への歴史学』河出書房新社。

Doescher, I. (2013). *William Shakespeare's Star Wars: Verily, A New Hope*. Quirk Books.

Milne, A. A. (1992). *Winnie-the-Pooh*. Puffin.

“War Office Report on ‘Shell Shock’”. *The National Archives*. (n.d.). [www.nationalarchives.gov.uk/education/resources/medicine-on-the-western-front-part-two/war-office-report-on-shell-shock/](http://www.nationalarchives.gov.uk/education/resources/medicine-on-the-western-front-part-two/war-office-report-on-shell-shock/)